

2015年度 国際文化情報学会 発表要旨(受賞作品)

法政大学, 国際文化学部

(出版者 / Publisher)

法政大学国際文化学部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

異文化 / 異文化

(巻 / Volume)

17

(開始ページ / Start Page)

10

(終了ページ / End Page)

53

(発行年 / Year)

2016-04-01



最優秀賞

ブエノスアイレスにおける 沖縄移民の「救済活動」

—第二次世界大戦直後の沖縄系社会

国際文化研究科国際文化専攻博士後期課程

月野楓子

本報告では、第二次世界大戦終戦後にアルゼンチンの首都ブエノスアイレスに暮らす沖縄移民によって行われた「救済活動」について述べ、戦後の沖縄系社会の特徴を明らかにした。アルゼンチンにおける沖縄移民については研究が少ないため、報告では刊行資料を主に用いて移民開始からの歴史、生活史を踏まえ、第二次世界大戦後に沖縄移民らによって行われた日本及び沖縄への「救済活動」及び活動をめぐる諸組織が、戦後のアルゼンチンにおける沖縄系社会の形成基盤となったと結論付けた。

南米のアルゼンチンでは 20 世紀初頭から日本人が仕事を求めて入国を始めた。最も多かったのは沖縄出身の移民であり、第二次世界大戦以前は日本人移民の約半数を占め、親族を呼び寄せながら数を増やした。入国した者の多くは仕事の多い首都ブエノスアイレスを中心に生活し、同郷者や職業ごとの組織などを形成しながら生活の基盤を築いた。移民先において経験した第二次世界大戦における日本の敗戦は、移民にとって出稼ぎから定住への転換点となり、とりわけ地上戦が行われた沖縄出身の移民にとっては、故郷は望んでも帰ることのできる状況になかった。

終戦後、ハワイ、北米、南米各国に戦前より暮らしてきた日本人移民は、敗戦した「祖国」の窮状を救うべく、衣類や食料など、主に物資を送る「救済活動」を展開した。連合国の一員であったアルゼンチンにおいて、枢軸国を祖国に持つ日本人移民は「敵国人」であったが、アルゼンチンは日本に対して終戦直前まで国交断絶及び宣戦布告を行わず、強制収容が大規模に行われたアメリカ、ブラジル、ペルーにいた日系人と比較すると戦中・戦後の待遇は劣悪ではなかったといわれる。そうであっても敵性国家としての扱いが解除されるのは 1947 年を待たなければならず、「救済活動」はこの年を境に活発化した。

沖縄出身の移民たちは、日系社会の「救済活動」に参加しながらも沖縄向けに特化した活動を同時並行で開始した。戦後米軍占領下に置かれた故郷を支援するための「救済活動」には多くの人が協力し、また、それは、戦後の日系社会の中で沖縄系社会が一部において中核を担いつつ、独自の存在になっていくという意味を持つものであった。

「救済活動」にかかわった主な組織は、日本戦争罹災者救恤委員会、沖縄救済会、沖縄音楽

舞踊協会であった。なかでも沖縄音楽舞踊協会は、資金集めにあって大きな成果をあげたのみならず、沖縄の音楽や踊りを通して、被災状況や親族の様子もわからないまま故郷と離れて暮らす沖縄移民に「慰安と親睦」の場を与えた。

こうした「救済活動」と、「救済活動」をめぐる諸組織は、戦後のアルゼンチン・ブエノスアイレスにおける沖縄系社会の基盤となり、「救済活動」をめぐる協働関係は、その後の沖縄系社会と組織形成を特徴づけた。



奨励賞

大衆社会におけるメディアと暴力

——映画『ハンナ・アーレント』から現代を考える——

国際文化研究科博士後期課程

田島樹里奈

● 本発表の狙い

本発表の目的は、映画『ハンナ・アーレント』を切り口に、大衆社会におけるメディアと暴力の密接な関係について、哲学的な考察を加えながら検討することであった¹⁾。映画『ハンナ・アーレント』は、「アイヒマン裁判」の傍聴記をめぐって生じた哲学者ハンナ・アーレントの一連の事件および彼女の思想を描いたものである。本発表が、この映画に依拠した理由と狙いは、以下の四点にある。第一に、映画という身近な媒体を使用することで、聴衆である10代・20代の学生さんにも本テーマ（哲学・メディア・暴力）に関心をもってもらいやすいこと。第二に、本映画はすでにDVD化されているため、映画を見ていない人でも、発表後に身近なところから関心を広げていくことができること。第三に、映画では描写されていない当時の時代背景を発表者が補完しながら説明することで、アーレントの思想と当時の時代背景が不可分な関係にあることが理解しやすいこと。第四に、「アイヒマン裁判」を巡るアーレント思想を通じて、学問としてやや敬遠されがちな哲学が、実際には日常生活と密接に結びついているということを実感してもらいやすいこと。

さらに、発表者としては、当時の時代背景がかかえる特異性を、「メディア」と「暴力」というキーワードで捉えることによって、次の三点を指摘することを意図していた。第一に、メディアはたんに情報を伝えるための媒体であるだけでなく、プロパガンダとして人を操作し、社会を大きく変える力を持ちうること。第二に、たとえ時代が異なり、技術的な性能が異なっていたとしても、メディアには人種差別・迫害、戦争、テロリズムといった大規模な暴力を促したり統制したりする力を持ちうること。第三に、現代に生きるわれわれが、歴史から学び、それらを批判的に検討することを通じ、国際文化学における学問的課題を再考するきっかけを得られること。

メディアや暴力の問題は、現代社会に暮すわれわれにとって、もっとも身近な問題であり、「国際文化」というフィールドにいる以上、避けることのできない重要なテーマである。難しい哲学書を読むことだけが哲学を学ぶことではない。私たちが生きるさまざまな場面で哲学的問いは生起する。アーレントが、人が考えることをやめたとき、人として生きることを放

1)なお本発表は、2016年3月出版の『国際社会人叢書2 <境界>を生きる思想家たち』(法政大学出版局)を元としている。そのため、アーレントの人物・思想紹介については、本書(第2章)を参照されたい。本報告書では、上記の拙稿では扱わなかったメディアの部分を中心に記載する。

棄することになると述べていたように、われわれが主体的に過去から学び、現在と未来について思考しなければ、よりよい未来は訪れない。本発表では、アーレントが生きた時代を概観することにより、現代社会におけるメディアと暴力をめぐる問題点を考える一つのきっかけを提供することができたと考えている。

●メディア社会と現代の暴力

かつてボードリヤールは、近年でもっとも「テレビの使用法を心得ていた」のはサダム・フセインだと述べていた。彼がそのように述べるのは、フセインが「テレビはメディアに過ぎず、情報は情報でしかないこと」を知っていたからだ。メディア戦争とも呼ばれた湾岸戦争から24年、そしてハリウッド映画のようなスペクタクル性を見せつけたアメリカ同時多発テロから14年経った2015年の今、世界は新たな局面を迎えようとしている。

周知のように、近年、YouTube、Facebook、Twitter、Instagramなど、数々のソーシャルメディアを駆使しながら、急激に活動勢力を広げているのが「イスラム国 (IS, ISIS²)」である。彼らはソーシャルメディアの公共的性質をいち早く採用し、世界80カ国とも言われる国々から参加者を募っている。その効果は絶大で、これまでのイスラム系過激派組織とは異なり、彼らは多くのヨーロッパ系メンバーを抱えている³。しかも、技術に精通したメンバーが数多くいるため、「イスラム国」はウェブを利用するどのテロリストグループよりも効果的にソーシャルメディアを使用していると分析するアナリストもいる。さらに彼らは「The Dawn of Glad Tidings (吉報のはじまりの意)」と呼ばれるアンドロイドモバイル機器のためのアプリを開発したと言われている。このアプリのユーザーは、「イスラム国」の活動について最新情報を知ることができるという⁴。

こうした事態にアメリカ政府は、Kindle版書籍で『イスラム国百科事典』(Islamic State Encyclopedia⁵)まで出版している。そこには、9・11から13年を迎える前夜2014年9月10日に発表された、オバマ大統領の「イスラム国 (ISIL) に関する声明」も含まれている。オサマ・ビンラディンも先進ネットワークを構築したことで世界を巻き込んだが、「イスラム国」の技術は圧倒的であり、世界の脅威でもある。そして、彼らがソーシャルネットワーク

2) 同組織は、2014年6月29日、「イスラム国 (IS: Islamic State)」の樹立を宣言し、これまで用いていた「イラクとシリアのイスラム国 (ISIS)」あるいは「イラクとレバントのイスラム国 (ISIL)」の名称を廃止すると発表した。オバマ大統領をはじめとして、彼らの宣言を認めない欧米諸国や国連などでは、「IS」ではなく「ISIL」を使用している。BBCやWashington Postなどでは「IS: Islamic State」を用いており、報道機関や国によって呼び方は区々である。これまで「イスラム国」は複数の名前を持っていたが、その理由の一つには、彼らが周囲に対して新しいイメージを売り込むためであるとも言われている。2004年にアブムサブ・ザルカウィ容疑者が設立した国際テロ組織アルカイダの分派。(Charles River ed., The Islamic State of Iraq and Syria: History of ISIS/ISIL, CreatSpace Independent Publishing Platform, 2014.)

3) 2014年9月26日付のインターネット版BBC Newsによれば、シリアとイラクで活動しているヨーロッパ人は、3000人を超えているとされている。

4) HUFF POST TECH, "SIS Use of Social Media Is Not Surprising" (Alessandro Bonzio, 2014.9.15)

5) U.S. Government, Islamic State Encyclopedia: America's War Against ISIS / ISIL Terrorism in Iraq and Syria, Progressive Management, 2014

やわれわれに身近なメディアを用いているという意味では、日本に住む私たちもけっして人ごとではない。

以上のように、現代では、インターネットを中心にしたメディア（媒体）が巧みに利用され、さまざまな犯罪の手段あるいは道具となっている。しかし、メディアが暴力と深い関わりを持つようになったのは、もちろん現代にはじまったことではない。本発表では、アーレントとの関わりから、その一つの事例として、ナチズムとユダヤ人問題を取り上げ、メディアがどのようにヒトラー政権で活用され、ユダヤ人絶滅計画が遂行されたかを概観する。

1. 映画『ハンナ・アーレント』の背景にあるもの

映画『ハンナ・アーレント』の主題として描かれているのは、「アイヒマン裁判」についてのレポートを執筆し、それをめぐって大きな波紋を呼んだ哲学者アーレントの姿である。映画では、実際のアイヒマンの映像が使われながら、ストーリーが展開しており、アーレントの葛藤や複雑な人間関係の様相が見事に描かれている。

「アイヒマン裁判」とは、ナチズム政権が実行した「ユダヤ人絶滅計画」において重要な役割を果たしたアドルフ・アイヒマンの裁判である。アイヒマンは、全体主義のヒトラー政権下において、絶滅計画の対象となった人々を強制収容所へ移送する部署の幹部であった。そして、ユダヤ人絶滅計画を遂行するにあたり、重大な役割を担っていた男であった。1961年にアイヒマンが逮捕されたことを知ると、アーレントは、『ザ・ニューヨーカー』という雑誌の編集者のところへ行き、裁判のレポーターになりたいと申し出る。通信員となることの許可を得ると、アーレントは早速エルサレムへ向かい、アイヒマン裁判の傍聴を行なう。そして、裁判のレポーターとして記事を執筆する。ところが、彼女の記事は、出版と同時に、大きな批判と誹謗中傷に包まれることになる。映画では、こうした一連の騒動と、それに立ち向かう彼女の思想が描かれている。

本映画は日本でも2013年に岩波ホールで上映され、映画配給会社も驚くほどに大盛況となった。この手のミニシアター系では、近年まれに見るほどの人気ぶりだったという。トロツタ監督は、映画スタッフへのインタビューで「全体主義への怒り」を語っており、現代社会における「自由な討議の欠如」を指摘していた。つまり、「アイヒマン裁判」をめぐるアーレントを描くことで、現代社会にもある種の全体主義的な危険な要素が潜んでいることを警告として発していたのではないだろうか。

ところで、この映画が舞台となるのは、アーレントがフランスの次に亡命した国であるアメリカである。しかも、アーレントがアメリカに住んで20年近く経過した1960年代からストーリーが始まっている。そのため、50年近い彼女の人生の背景は描かれていない。そこで本発表では、映画のなかでは描かれなかったアーレントの背景をごく簡潔に紹介した。

2. 哲学者アーレントが生きた時代（ナチズム・全体主義・ユダヤ人絶滅計画）

そもそも全体主義とはどのような体制だったのだろうか。アーレントの著作『全体主義の起源』に即しつつも、一言でまとめるならば、国民を一つのイデオロギー（政治的な思想）の下で統合し、国民を統制する政治体制のことである。この体制下では、あらゆる自発性を抹消することが要求され、命令に従うだけの人間を作り出すことが目指された。武力によって独裁政権を推し進めるファシズムが勢いよく拡大すると、ヒトラーは、自らの独裁による統治国家ドイツを、「第三帝国」と称し、自民族を讃美した。そして純粋なアーリア人優位の世界を作り出すべく、ユダヤ人、共産主義者、同性愛者、身体障害者などを絶滅させる計画を企てたのである。

とりわけナチズムの全体主義が恐ろしいのは、「ユダヤ人絶滅計画」を国家の法律に則って実行させたことである。つまり、国家自体が法的に人種あるいは民族差別を制度化し、虐殺の原理を準備したのである。本来、法とは、人々が安全に暮らすための秩序を維持するために制定される。しかし当時のドイツにおいては、〈ドイツ国市民法〉と〈ドイツの血液とドイツの名誉を守るための法律〉とが、〈ドイツ的血液の所有者〉でないものに対して、無権利のドイツ国籍者としての烙印を押すことになっていた。そして、ユダヤ人の虐殺を合法的に実行させたのである。

またアイヒマンを含め、この虐殺に関わった多くの者たちが、「任務」としか考えていなかったことも全体主義の恐ろしさである。さらに、ここで見過ごしてはならないのは、実際にはヒトラーが、国民の選挙によって選ばれていたという事実である。アーレントが強調したように、ヒトラー政権の掌握は、民主主義的で、人権保障を定めたことで知られる「ワイマール憲法」のすべての規定に照らしても、合法的だった。つまり、あの恐ろしい虐殺計画を主導したヒトラーは、ドイツ国民の支持によって政権の座に就いていたことを忘れてはならない。それではなぜ、大衆はヒトラーを国のトップに選んだのだろうか。

3. 20世紀のメディアと暴力

そもそも第一次世界大戦で敗戦し、政治的にも経済的にも不安定だったドイツにとって、国家を強化することは必須の課題であった。国民も敗戦の屈辱と不況から脱し、何とか国力を上げたいと考えていた。そうした状況下において、ヒトラーは、農民たちにとっても「最後の希望」だったという⁶⁾。

ここで注目すべきなのが、ヒトラーのメディア戦略である。当時、ドイツでは英米よりおくれて1923年にラジオ放送を開始していた。ラジオは大衆メディアとして飛躍的に広がり、国民の一大情報源となっていた。ヒトラーは、そのラジオをいち早く操り、芸能のように大衆を引き込んだのである。1930年代の選挙戦では、メディアの力が効力を発揮した。ナチ党

6) ルドルフ・ヘベルレ『民主主義からナチズムへ』中道寿一訳、お茶の水書房、一九八九年、八十七頁。

が第一党になるまでの間に、ラジオは国有化され、さらに放送局は、ナチ政府に対する百パーセントの奉仕を要求された⁷⁾。

こうした状況下で、ヒトラーの「宣伝広報大臣」となったのが、ヨーゼフ・ゲッベルスという男だった。彼はカリスマ的にマスコミを操る優れた才能をもっていた。ゲッベルスは、ヒトラーを讃美し、イメージを変えることで、巧みに大衆に売り込んだのである。そして大衆が集まる場において、大規模で洗練された一種のパフォーマンスとして演出することで「宣伝の近代化⁸⁾」を図った。

アーレントによれば、ナチスのプロパガンダは、それ以前および以後のいかなる大衆プロパガンダよりも、現代大衆の願望をよく知っていたという。それは、ユダヤ人を世界支配者に仕立て上げ、その地位を引き継いだものこそが、世界支配の座を獲得することができるという幻想をドイツ国民に植え付けることだった。そしてゲッベルスの戦略は、見事に成功した。

ゲッベルスの戦略の一つは、ラジオを全国民に普及させ、すべての国民がラジオを聞くようにすることであった。ラジオ番組のナチ下は急ピッチで進められ、文化政策的理由からすべてのラジオ会社の義務的番組として「国民の時間」シリーズが始められた。ドイツのすべての放送局は、毎日19時～20時に番組「国民の時間」を導入したのである。

また、ナチ化されたラジオ連盟は、国民を「国家の組織に組み入れる」ため、すべての国民を強制的にラジオのリスナーにする必要があった。そこで宣伝省は、ドイツの28のラジオ装置製造会社に委託し、誰でも買える安い受信機を共同開発した。ナチスはこの装置を武器に、放送メディアを通じて国民の統合に乗り出したのだ。しかも全体主義のナチスは、ラジオ聴取を個人の自由に委ねるのではなく、企業や工場でも従業員が集合して必ず放送を聞くようにと「放送監視員」というシステムまで作り出した。まさに全体主義的な統一を目指す、抜かりのない戦略であった。

さらにヒトラーは、映像メディアにも力を注いだ。ヒトラーが、総統としてのキャラクター・イメージを重要視し、映像メディアを駆使したことも、政権に辿り着くための大きな鍵となった。ナチスは複数の記録映画を製作したが、なかでも記録映画『意志の勝利』が映画としての次元を越えて、ナチ・プロパガンダを大衆社会へ広める標識的役割を果たしたと言われている。

この映画を作ったリーフェンシュタールという人物は、ヒトラーの委託で作成しただけで、本人自身も「自分は政治には無関係だ。ただ美的リズムを追求しただけだ」と語っていた。しかし、その映像の絶大な美的効果がナチを利したとして糾弾されることになる。結果的に彼女は、ナチ・プロパガンダの成功を映像的に具現した最大のナチ協力者の一人として位置

7) 平井正『20世紀の権力とメディア』雄山閣、一九九四年、三十一頁。

8) 草森紳一『宣伝の人間の研究 ゲッベルス』番町書房、一九七八年、六十頁。

づけられてしまったのである。

それでもこの映像の美的効果が、強烈な印象を与えたのは事実で、ローリングストーンズのミック・ジャガーがこの映画を15回以上も見て、そこからロックファンを陶酔させる手法を学んだと言われたり、デヴィッド・ボウイがこの映画の印象から、ヒトラーを「最初のロック・スターの一人」と呼んだという話もある。（ちなみに平井は、ナチ党大会について、時代状況の中で妄想と現実が結合した混合物であり、今世紀が生み出した大衆プロパガンダの特産品であると述べている⁹⁾）

こうしたメディアの新しい進歩とブームのなかで、ヒトラーは大衆を魅了し、喝采を浴びながら政権を掌握したのであった。ドイツ国民は、メディアを通じて知らず知らずのうちに洗脳され、ヒトラーのイメージと未来への希望を膨らませた。一方、ヒトラーは、ユダヤ人の悪いイメージを国民に植え付け、ユダヤ人絶滅計画へと導いていったのである。そしてヒトラーが生み出したものとは、600万人ものユダヤ人虐殺という恐ろしい悲劇であった。

4. 批判的思考と他者の立場で考えること

話をアーレントに戻してみよう。アーレントが執筆したアイヒマンの裁判レポートは、1963年2月から1ヶ月間にわたって雑誌に掲載された。毎週土曜日に掲載された「イェルサレムのアイヒマン——悪の凡庸さについての報告」は、5回の連載を経た後、同年の5月に本として出版されることになる。しかし、アーレントの報告は、雑誌掲載の直後から、凄まじい批判と非難の声を浴びることになった。とりわけ、彼女が一連のアイヒマン裁判を形容するさいに「悪の凡庸さ」と表現したことは、未曾有の大罪を凡庸な悪といったとか、ユダヤ人への愛がまったくないとか、あるいはアイヒマンの罪を軽くしようとしているといった、彼女の意とは異なるさまざまな批判と非難の的になった。

なぜ、アーレントは「悪の凡庸さ」と表現するような裁判レポートを執筆したのだろうか。そして彼女は、「悪の凡庸さ」という言葉で何を言おうとしたのだろうか。まず重要なのは、アーレントはこのレポートを通じて、自分の目を見た「真実」をありのままに人々に知らせる必要があると考えたということである。アーレントによれば、何百万人ものユダヤ人を絶滅させるための虐殺行為に関与したその男は、誰の目から見ても「怪物」や「悪人」などではなく、どこにでもいるただの凡庸な人間だった。というのも、アーレントが、アイヒマンから見出したものとは、「自分の昇進にはおそろしく熱心」であるということだけだったのだ。彼女が見るかぎり、彼には反ユダヤ主義的な感情も思想もなく、昇進以外には何らの動機もなかったのである。アーレントは、まさにこのことにもっとも大きな衝撃を受けたと繰り返し述べている。

9) 平井正『20世紀の権力とメディア——ナチ・統制・プロパガンダ』雄山閣、一九九四年、九二頁。

以上のような、ナチズムと全体主義、そしてアイヒマン裁判をめぐるさまざまな問題がアーレントに突きつけたのは、「考える」とは何か、「判断」とは何かという、もっとも根本的なことだった。そして彼女が全体主義に見出したものとは、「道徳性の崩壊」だった。しかもアーレントは、道徳性の崩壊という事態が、何らかの邪悪な心を持った人物によって生じたのではなく、たんに当時の体制に「同調した」だけの普通の人々によって引き起こされたことに、最大の危機感を抱いた。これらの事態が示唆しているのは、私たちが社会生活を営み、集団の中で活動する以上、いつでもこうした状況に遭遇する可能性があるということである。

アーレントがアイヒマン裁判をめぐるさまざまな問題に巻き込まれながら、あらためて学んだことは「他者の視点に立って考えてみること」の重要性であった。アーレントは晩年、ニューヨークの大学生に向けて、カントの『判断力批判』という哲学書の講義を行った。そこで彼女は、「批判的思考」と「想像力＝構想力」の重要性について解説した¹⁰。

今日のメディア化された現代社会において、われわれはこれまでになくスマートフォンやパソコンなどのメディアに依存した生活を送っている。われわれにとって歴史が重要なのは、たんに過去の出来事を学ぶことだけでなく、そこから学びを得て、現代の問題に引きつけて考えることにある。そのためには批判的な思考と哲学的な思索が重要な意味をもつ。本発表では、学部生にも分かりやすいような発表を心掛けた。本発表が、発表者だけでなく聴衆者の方々にとっても何らかの形で本テーマやそれを巡る問題について考えるきっかけになれば幸いである。

アーレントは、「私たちには世界を変え、その中で新しいことを始める自由がある」と述べていた。われわれ一人一人は、新しい未来を切り開く自由をもっている。その自由をいかに活用するかはわれわれ次第でもあることをアーレントは教えてくれた。

10) アーレントのカント講義については、注1の拙稿または以下を参照されたい。(ハンナ・アーレント『カント政治哲学の講義』浜田義文訳、法政大学出版局、一九八七年。)



■■■■■参考文献■■■■■

- ハンナ・アーレント『イェルサレムのアイヒマン』大久保和郎訳、みすず書房、一九六九年。
- ハンナ・アーレント『全体主義の起源3』大久保和郎、大島かおり訳、みすず書房、一九七四年。
- ハンナ・アーレント『パリアとしてのユダヤ人』寺島俊徳、藤原隆裕宜訳、一九八九年。
- ハンナ・アーレント『カント政治哲学の講義』浜田義文訳、法政大学出版局、一九八七年。
- エリザベス・ヤング=ブルーエル『ハンナ・アーレント伝』荒川幾男他訳、晶文社、一九九九年。
- ディームート・マイヤー「民族的不平等」を例としたナチズムにおける司法の法理論的機能規定』『法、法哲学とナチズム』ナチス法理論研究会訳、みすず書房、一九八七年。
- マルチン・クリーレ「ナチズムからの国家哲学上の教訓』『法、法哲学とナチズム』ナチス法理論研究会訳、みすず書房、一九七八年。
- ルドルフ・ヘベルレ『民主主義からナチズムへ』中道寿一訳、お茶の水書房、一九八九年。
- K.D. ブラッハー『ドイツの独裁——ナチズムの生成・構造・帰結』山口定、高橋進訳、岩波書店、二〇〇九年。
- イマニュエル・カント『カント全集 8』、牧野英二訳、岩波書店、一九九九年。
- 草森紳一『宣伝の人間の研究 ゲッベルス』番町書房、一九七八年。
- 谷喬夫『ナチ・イデオロギーの系譜』新評論、二〇一二年。
- 平井正『20世紀の権力とメディア——ナチ・統制・プロパガンダ』雄山閣、一九九四年。
- 拙論「メディア化時代の『宗教』——デリダにおける『世界ラテン化』』『異文化』16号所収、法政大学国際文化学部編、二〇一五年三月発行。



現代中国におけるミャオ族社会の変貌

——改革開放後の婚姻習俗を中心にして——

国際文化研究科

任涵廷

本報告の目的は、婚姻儀礼や婚姻習俗の変化原因の分析を通じて、近代化がミャオ族の伝統文化に与える影響を明らかにすることである。

改革開放以降、経済発展やインフラの整備、また民族観光の振興は、外部の観光客の流入、そして若者たちの出稼ぎを生み出した。こうした人の流動により、少数民族社会は重大な転換期に直面している。彼らの伝統文化が急速に変容し、場合によっては消失しようとしている。しかし、民族の風俗習慣の変化と近代化との関係について、文化的な視点からの研究が少ない。伝統的なミャオ族社会は父系親族集団を基盤として成り立っており、婚姻関係を通して人々のネットワークを広げている。本報告ではミャオ族の婚姻習俗を中心にして、ミャオ族の伝統文化の変化を論じたい。

ミャオ族の婚姻習俗の変化は、主に初婚年齢、恋愛形式、女性の嫁ぐ時期、民族衣装、婚姻範囲において起こっている。①女性の初婚年齢は、1990年代から20歳代が主流となり（佐藤、2014）、②生涯の伴侶を伝統的には対歌（歌掛け）によって得ていたが（鈴木・金丸、1985）、今では歌わ／歌えなくなったこと、③女性は婚礼後も相当の期間「不落夫家」（実家に留まること）をしていたが（巖、1996）、1990年代以降は時を置かずに「坐家」（夫方で夫婦同居）に至っていること、④それに伴い、実家から婚家への新婦の移動と嫁入り衣装の移動がもはや同じタイミングでは行われなくなったこと（佐藤、2014）、⑤人の流出が起こり、外地において同じミャオ族でも異なる下位集団の異性や他の民族の異性と結婚するケースも出てきていること（曾、2002）などである。

これらの婚姻習俗の変化の原因として、民族政策や学校教育の発展、メディア、ファッション、市場原理、科学知識、文化伝統など様々な要素の影響によりこの半世紀余りの間に変化してきているという分析がある（刘・吴、2009; 楊・徐、2000）。

報告者は2015年8月に中国貴州省の黔东南苗族侗族自治州雷山県に属するS村で調査を行った。村で調査を行い、得られた内容について報告した。

○調査時期：2015.08.13～2015.08.20

○調査先：中国貴州省の黔东南苗族侗族自治州・雷山県・S村

○調査方法：フィールドワーク、インタビュー調査

○調査内容：①現地の概況の把握 ②インタビュー

○調査対象：インタビュー対象は5人

インタビュー対象者	インタビュー対象者の紹介
対象者 A	女、1972 年生まれ、1987 年に S 村の夫と結婚した。 上郎徳村近くの村—Y 村出身、「家庭旅館」の経営者。
対象者 B	女、1994 年 S 村に生まれ、未婚。貴州省の凱里市の大学二年生。 大学の休みの間を利用し、家計を助け、観光記念品及び苗族の刺繍を販売する。
対象者 C	女、1941 年生まれ、1959 年に S 村に嫁に入った。 夫は 1939 年に生まれた S 村出身の男性。
対象者 D	男、結婚の時は 1990 年代、「家庭旅館」の経営者。
対象者 E	女、湖南省出身の漢族、夫と二人は広東省で出稼ぎの時に知り合った。 一年間の恋愛を経て、2004 年の苗年節に結婚した。

インタビューに基づいて、現地の概況をまとめた。S 村の生業、通婚状況、結婚を中心に、現地の事情を紹介する。

S 村の生業は、主に農業と観光業である。農繁期は毎年の 9 月から始まり、観光業は通年でやっている。

S 村は上 S 村と下 S 村に分かれており、川の上流にあるほうが上 S 村、下流にあるほうが下 S 村である。

上 S 村では陳姓が多い。呉姓もいるが、村内の通婚は禁止されている。そして、下 S 村の于氏とも親族関係にあるため、通婚できない。

村の生活は苦しく、外から嫁いできた人が少ない。そのため、S 村の結婚適齢期の男性が結婚できない問題が現れる。外部から嫁いできた女性は異民族間の結婚はあったが、離婚ケースが少なくない

S 村の結婚式が集中する時期は 11 月と 12 月、つまり苗年節(ミャオ族の新年)の時期である。また旧正月(旧暦の新年)に結婚式を行うこともある。しかし現在では、村内の若者は出稼ぎで村にいないため、11 月、12 月に結婚するケースは以前に比べ少なくなった。

インタビュー調査に基づいて、現地の婚姻習俗の変化を表 1 にまとめた。

1) ミャオ族の結婚の三つの段階は配偶者を選ぶ段階、婚約と婚礼、「不落夫家」(一時的別居)から「坐家」(夫方で夫婦同居)に至る段階である。(蔵、1996)

調査の項目	変化前	変化後	情報源
恋愛対象	ミャオ族同士	各民族	B
恋愛形式	伝統型の自由恋愛 ①游方 ②話し掛ける	現代型の自由恋愛	A/B/D
初婚年齢	10代後半が主流だった	20歳代が主流だった	A/B/C/D
結婚集中時期	11月、12月、旧暦の新年	旧暦の新年	A/B
女性の嫁ぐ時期	①配偶者を選ぶ②婚約と婚礼 ③「不落夫家」→「坐家」	③「不落夫家」→「坐家」 の段階がなくなった	A/B/C/D
結納	1987年：570元 1990年代：1万元	2015年頃：5-7万元 個別10万元	A/D
持参財	新婦と民族衣服は同じ タイミングで夫側に移動する	・新婦は先、民族衣服の夫側 に移動するタイミングが遅延 される ・家電製品が持参財として登場	A/B/D/E
嫁入り	せめて実家から一番近くの 坂道まで嫁を見送る	嫁は部屋を出たら、車に乗る	A/B
嫁取り	夫の出迎えは禁止された	新郎側の未婚の娘を連れて いけば、夫の出迎え可能	B
里帰り	嫁の父親が花婿の家に迎え にくる	嫁は自分で実家に帰る	A

表1 現地の婚姻習俗の変化を中心に、調査からわかったこと

現地の人の恋愛対象、以前はミャオ族同士だけが許された。しかし、現在では、恋愛対象がミャオ族に限らない、各民族の人々と通婚できるが、異民族間の通婚のケースはやはり漢族とミャオ族間またはドン族とミャオ族間が多い。

恋愛形式は以前の伝統型の自由恋愛——游方²と話し掛ける形式から現代型の自由恋愛の形式に転換した。初婚年齢は10代後半から20代に変化した。婚姻儀礼及び婚姻習俗を簡略化する傾向も出てきている。

S村の結婚式は11月と12月の苗族の新年の時期に行うか中国の新年に結婚式を行うが、現在では、村内の若者は出稼ぎで村にいないため、11月、12月に結婚するケースは少なくなった。

2) 游方とは生涯の伴侶を捜す場所、つまり「游方坪(ヨーファンピン)」で対歌(歌掛け)したり、お互いにお互いの気持ちや家の事情を紹介してあって、もし気になれば相互に物を贈ることである。
3) 現代型の自由恋愛は少数民族の伝統的な交際形式を利用せず、男女が家や所属する社会的グループに拘束されることなく、自らの意思とする恋愛である。

以前、女性が夫の家に本当の嫁ぐのは結婚儀礼から数年を経た「坐家」の段階で、それまで実家で過ごす「不落夫家」の段階は婚姻習俗の中で不可欠であった。現在では、新婦は結婚式とほぼ同時に夫の家に嫁いてきて、「不落夫家」の段階がなくなった。

結納の金額が以前と比較して増えたこと、結納品の数も増えたことがわかる。

持参財としての民族衣装は、以前は、「不落夫家」という期間に自分で揃えたと言われた。しかし、現在では、若い女の子は就学や出稼ぎなどのため、刺繍の技術も身につけなくなり、「不落夫家」の習慣も少なくなった。そのため、今の嫁の民族衣装は母親が代わりに作っている。持参財には家電製品がみられるようになった。

嫁入りの形式の変化では、昔の習俗は、嫁入りの時、嫁の家族はせめて家から見える一番遠い所まで、つまり実家から一番近くの坂まで見送る。現在では、嫁は部屋を出たら、直接に車に乗る。

嫁取りの変化については、以前、夫の出迎えは止された。しかし、最近では、夫は未婚の身内の若い娘をとまなえば出迎えもできるそうである。

里帰りについては、2000年頃から変化が始まる。2000年以前、里帰りの時は、嫁の父親は花婿の家に迎えにきた。変化後は自分で実家に帰るようになった。

ミャオ族の伝統的な結婚はミャオ族どうしによるものであるが、近年では、ミャオ族と他民族の通婚が増えてきた。そのため、他民族との婚姻の場合、ミャオ族の婚姻習俗にどのような変化がみられるかを表2にまとめた。

調査の項目	通常ミャオ族間の結婚	異民族間の通婚例
嫁入り	実家から嫁いでくる	<ul style="list-style-type: none"> ・貴州省ミャオ族トン族自治州の州都—凱里のホテルで準備して、新郎が迎えに行った。 ・新郎の父の姉妹の家で嫁入りを待つ。
晴れ着	自分また母親は民族衣装を作り、自分で作ると、民族衣装を持って嫁ぐ。母親が作ると、民族衣装は実家に置いたまま嫁ぐ	外部の人はミャオ族の晴れ着を持っていなかったため、新郎の母親の晴れ着を着た。結婚式が終わったら、返した
接客	来たお客さんを接待する	嫁は方言が通じないため、接客しなかった
結納・持参財	通常は結納と持参財双方とも用意する	インタビューの対象者Eは結納も、持参財もなかった

表2 異民族間通婚とミャオ族同士の結婚の対比

嫁取りの過程で、外部からの花嫁は、貴州省ミャオ族トン族自治州の州都—凱里のホテルで準備し、新郎は迎えに行った。または、新郎の父の姉妹の家で嫁入りを待っていた。外部の人はミャオ族の晴れ着を持っていなかったため、結婚式の時、新郎の母親の晴れ着を着たが、結婚式が終わったら、すぐ返した。嫁は外部の人で、ミャオ族の方言が通じないため、結婚式では接客しなかった。インタビューの対象者は結納も、持参財もなかった。

以上の文献調査と現地での調査結果の分析から以下の結論が出た。

現地、ミャオ族の人々の恋愛対象がミャオ族に限らず、各民族の人々と結婚ができるようになった。恋愛形式は伝統型の自由恋愛——游方と話し掛ける形式から現代型の自由恋愛の形式に転換した。インタビュー対象者 A、B、D の答えからは、1990 年代から現地の恋愛形式は伝統型から現代型へ転換したと言える。結婚形式と女性の嫁ぐ時期の変化から見れば、伝統的な習俗は徐々に消失している。伝統文化と現代文明の取捨は後者に傾いた。婚姻年齢の法的な変更に伴い、ミャオ族の女性の初婚年齢には変化が起きた。初婚年齢の変化に伴って里帰りも変化することも明らかになった。異民族間の通婚では、物理的、客観的な理由で、伝統的な婚姻習俗の簡略化が起こっている。異民族間の通婚はミャオ族の伝統的な婚姻習俗の変化を加速させているようである。

今回の調査では、儀礼や習俗のミクロな視点から比較し、検討した。今後、マクロな視座から、異民族間の通婚による民族の伝統的な婚姻習俗への影響を検討する。そして、民族の伝統的な婚姻習俗を通時的な視点から比較し、婚姻習俗の変化の意味、すなわち、婚姻習俗において変化した部分と変化しにくい部分に分け、後者の伝統文化において持つ意味を考察したい。

参考文献

日本語文献：

巖汝嫻『中国の少数民族の婚姻と家族』第一書房 1996 年

佐藤若菜「衣装がつなぐ母娘の「共感的」関係：中国貴州省のミャオ族における実家・婚家間の移動とその変容」『文化人類学』79(3):305-327,2014

鈴木正崇・金丸良子『西南中国の少数民族——貴州省苗族民俗誌』古今書院 1985 年

曾士才「中国における少数民族の“観光出稼ぎ”と村の変貌」鈴木正崇、吉原和男編著『拡大する中国世界と文化創造』弘文堂 2002 年

中国語文献：

刘鋒, 吴小花. 「苗族婚姻制度变迁六十年——以贵州省施秉县夸寨为例」『民族研究』, 02:38-46+109,2009

杨昌萍, 徐海兵. 「黔东南苗族婚俗的变化」『贵州师范大学学报(社会科学版)』03:58-60,2000



なぜ外国人労働者の 人権侵害は解決しないのか

——ハーシュマン理論からの探究——

松本ゼミ

望月智美

本研究は「売り手市場」にもかかわらず外国人労働者の人権侵害が解決しない原因を経済学者 A.O. ハーシュマンの理論を援用して探究するものである。

2022年ワールドカップ開催地のカタールでは、建設に従事する外国人労働者が次々と命を落としている。虫が湧くほど劣悪な居住環境、賃金未払いやパスポートの取り上げなど状況は深刻で、2022年までに4000人が亡くなると推測されている。しかし、実はこれは遠い国の話ではなく先進国日本でも似たような状況が起きているのである。日本では外国人技能実習制度のもとで多くの途上国の若者が働いている。働きながら技術を学び祖国に帰って活かしてもらうことが目的だが、月200時間に及ぶ残業や時給300円という薄給、いじめなど過酷な状況がマスメディアを通して伝えられ、労働基準関係法令違反も減る気配を見せない。現在アジアでは熾烈な外国人労働者争奪戦が起きており、企業の人事担当者が現地で懸命なリクルート活動を行う様子が2014年の報道番組でも描かれている。日本は労働力不足が懸念される建設や介護の現場を中心に受け入れの拡張を目指している。

以上のように、貴重な労働力としての外国人労働者は引手あまたである。市場競争の原理が働けば、必要とされている外国人労働者の待遇は改善されるはずである。なぜ人権侵害が続くのか。

ハーシュマンは、ナイジェリアの鉄道の新効率が他の輸送手段との競争の中で改善しなかった要因を、顧客がトラックという他の輸送手段に離れ（離脱）、フィードバックメカニズム（発言）が働かなかったためだとした。つまり、質やサービスを向上させるうえで離脱が重要視されてきたことに対して、発言も重要なメカニズムであると唱えた。この理論を援用し、外国人労働者が好条件の受入国へと離脱して改善を求める発言がなされず、一方で、日本に働きに来ざるを得ない人がいるために、人権侵害が解決しないのではないかとという仮説を立てた。労働者の送り手側としてベトナム、受入国として韓国と日本を事例に、人権侵害が叫ばれる日本から、国際的評価の高い受入政策を持つ韓国へ離脱することで、改善に必要な発言が日本で機能しないのではないかと考え、EBSCOとCiNiiによる英語と日本語の関連文献をレビューした。

検証の結果、日本から韓国への離脱も、改善を求める発言も確認されなかった。日本は安全で収入の高い国として農村のベトナム人の中で最も人気の国であり、むしろ積極的に日本へ向かう。この評価の背景には台湾やマレーシアという、より人権侵害の深刻な受入国の存在や、「成功して帰ってくるはず」という周囲からのプレッシャーに苛まれた帰国者が演じてしまう成功がある。では、なぜ発言がなされないのか。それは、「人気の国日本」への出稼ぎを手配してくれた親類やリクルーターの顔に泥を塗ることを恐れて、不当な扱いに口をつぐんでしまうからである。以上から、評価が保たれて離脱が起きず、且つリクルーターや親類との個人的な繋がりゆえに改善を求める発言もなされないことが、日本で人権侵害が解決しない一つの原因だといえる。

韓国では、NGO という市民社会の力が外国人労働者を支え、協働の抗議活動によって制度を改善させた過去を持つ。日本では、現在不法就労者への移行が起きやすい仕組みとなっており、出発前に課された高額な保証金による借金を苦に高賃金な不法就労先へ逃亡してしまうケースが後を絶たない。だが、一度非合法的な立場になってしまうと発言することは難しい。「発言」の場から「離脱」してしまう前に、いかに市民社会が支援するかが今後の課題である。

■■■■■参考文献・資料■■■■■

- A.O. ハーシュマン 『離脱・発言・忠誠－企業・組織・国家における衰退への反応－』 矢野修一訳、ミネルヴァ書房、2005年
- The Guardian (2013), "Qatar: The migrant workers forced to work for no pay," (<http://www.youtube.com/watch?v=e5R9Ur44XV8> 2015年1月30日閲覧)
- NHK クローズアップ現代『シリーズ 人手不足ショック②』（2014年6月12日放映）
- B, Daniele., Ueno, K., Hong, K. T., and Ochiai, E. (2011), "From Foreign Trainees to Unauthorized Workers: Vietnamese Migrant Workers in Japan.," *Asian and Pacific Migration Journal* . 20 (1), pp.31-53.



グローバル化と先住民族

～マヤ先住民族のフェアトレードの事例から～

佐々木一恵ゼミ

千葉かな

メキシコは NAFTA 等に加盟以降、経済的なグローバル化が急速に進展した。これまでは、エヒードという政府による土地配分の制度が存在し、農民たちは補助金や輸入農作物への関税賦課、輸入禁止などによって保護されていた（国中：2011）。しかし、経済のグローバル化により、農地を失う者も多く出るようになった。男性たちの中には太平洋岸の農園への移住、出稼ぎ、あるいは日雇い労働の職を探すことを余儀なくされた人が多く出た（桜井：2010）。また、NAFTA の猶予期間を過ぎてアメリカの農産物に対する関税が引き下がるにつれ、国内の農産物は競争力を失っていった（国本：2011）。こうして先住民族の生活はさらに困窮を極めていった。

先行研究では、他国のマヤ先住民族の貧困・差別問題、メキシコのチアパス州のマヤ先住民族の貧困問題、サパティスタ解放戦線を扱ったものが多くみられる。その一方で、現代におけるマヤの先住民族と経済のグローバル化との間に生じている新たな関係性に対して、多くの注目が向けられているとは言えない。そこで本発表では、ユカタン・マヤ先住民族の生活基盤にグローバル化が与えた影響を、「フェアトレード」という要素により再検討した。フェアトレードとは、「持続可能性」に繋がりにくい一方向的な援助ではなく双方向的な貿易に結びつく関係がより望ましいとの認識から生まれたシステムである（佐藤：2011）。これまでの研究は、コーヒーやチョコレートなどを事例に取り上げたものや、児童労働問題に結びつけたものなどはあるが、メキシコにおける経済のグローバル化と結び付けているものはない。本発表では、メキシコのユカタン・マヤ先住民族の生活基盤の中心である「農業」と、彼らのアイデンティティー表象を支える伝統衣装などの「手工芸品」という2点の「フェアトレード」に着目し分析した。

具体的な調査は、2015年1月から半年間、ユカタン州にあるマヤ農民学校で、この学校の行っている農産物のフェアトレードの活動に参加し行った参与観察と、同年5月に、バジャドリッドとその周辺の村を中心に活動している Dzitnup 女性刺繍職人協同組合の方々に行ったインタビューである。

このフィールド調査に基づき、ユカタン・マヤ先住民族たちがフェアトレードを通じてどのような活動を展開しているのか、進展するグローバル化に対してどのような対応を行っているのか、また、その問題点や課題、グローバル化との新たな関係性を検討した。



バレエと敵性文化

—ロシアの文化はなぜ排斥されなかったのか—

松本ゼミ

藤村菜由

本研究の目的は、「敵性文化」を歴史的に考察することで、関係が悪化した国の文化や言語を「敵性」と呼ぶことの妥当性を検証することである。

よく知られているように、太平洋戦争の頃には社交ダンスやジャズなどの米英音楽が「敵性文化」とされ、英語が「敵性語」として排斥された（永井 1991；大谷 1997；大石 2001）。しかし、20 世紀の日本の対外関係を考えるとロシア・ソ連の方が「敵」と考えられてきたにもかかわらず、ロシアの文化といえるクラシックバレエが「敵性文化」として排斥されたという話を聞いたことがない。そこで本研究では、まずクラシックバレエが日本に紹介されてから太平洋戦争終結までの期間に、「敵性文化」と呼ばれたことがあったかどうかを、「バレエ」で検索した新聞記事 140 件、文献 11 件から調査した。その結果、その期間にクラシックバレエは、「敵性文化」と禁止されることなく演じられていたことが分かった。では、「敵」と考えられていたロシア・ソ連の文化といえるクラシックバレエは、なぜ排斥されなかったのか。この問いを探究するため、排斥されなかったクラシックバレエではなく、排斥された文化に着目して調査した。

「敵性文化」で朝日新聞、毎日新聞、読売新聞のデータベースを検索したところ、三紙の創刊以来この語が初めて登場したのは読売新聞の 1941 年であり、「敵性語」は朝日新聞の 1942 年であった。日清戦争、日露戦争、第一次世界大戦、更に日中戦争の時代には、敵の文化や言語に「敵性」という言葉を付けることはなかった。このことから、敵性文化や敵性語という言葉は太平洋戦争期に誕生したと推測できる。敵性文化や敵性語を扱った 9 件の文献からは、太平洋戦争より前の 1930 年代後半から「仮想敵国」と見なした米英の文化を排斥する動きがあったことが明らかとなった。同時期に、日本が傀儡政権を立てた満州国とソ連の間で激しい武力衝突があったが、「敵性」は米英のみに向けられた。

「敵性」とはもともと戦時国際法において、交戦国など敵とみなす国に係る人やモノの扱いを定めるための概念であり（高野 1986）、文化や言語について使われることはなかった。それが、1930 年代後半になって米英両国の文化に対して突如使用されるようになった極めて特殊な概念であると考えられる。裏を返せば、クラシックバレエのように「敵」の外来文化でも排斥されないのが一般的なのである。

本研究では、クラシックバレエが排斥されなかった理由を排斥された「敵性文化」の分析

から類推する形で仮説的に導いた。しかし、なぜ米英の文化にのみ「敵性」のレッテルが貼られたのかは分析対象としていない。また、「敵性文化」の特異性を明らかにしたものの排斥される（されない）理由までを明らかにできなかった。

最後に本研究の合意について述べる。2011年8月韓流ブームを批判するインターネット上の投稿がきっかけとなり、フジテレビを取り囲む数千人のデモが継続的に行われた（朝日新聞 2011年9月1日）。理由は同局の韓流偏重の番組編成への批判だったが、両国側の政治問題が文化的な批判につながりかけたといえる。本研究で明らかとなったように特定の外国と友好的とは言えない関係になったとしても、その国の文化や言語まで「敵性」として排斥することは歴史的には非常に特殊な現象であり、決して一般化するものではない。日中、日韓の政治的な関係が必ずしも友好的とはいえない今日、互いの文化を退けあうことがないよう、歴史的に学ぶ必要があると考える。

■ ■ ■ ■ ■ 参考文献 ■ ■ ■ ■ ■

大石五雄『英語を禁止せよ—知られざる戦時下の日本とアメリカ』、ごま書房、2007年
大谷博「戦時下の敵性音楽の排除と音楽を享受する自由」『尚美学園短期大学研究紀要第11号』、1997年
高野雄一『全訂新版 国際法概論（下）』1986年5月30日全訂新版1版発行、株式会社弘文堂
永井良和『社交ダンスと日本人』、晶文社、1991年

■ ■ ■ ■ ■ 参考資料 ■ ■ ■ ■ ■

「〔読者眼〕 軽音楽は絶対必要▽日本のなもの」、『読売新聞』、朝刊、1941年6月1日
「卓球場の公」、『朝日新聞』、夕刊 :2、1942年10月
「500人デモ、ネットから火」、『朝日新聞』、朝刊 :37、2011年9月1日



最優秀賞

見つめなおす世界遺産

—地味だけど地味じゃなかった富岡製糸場—

佐々木直美ゼミ

柴翔太郎・遠藤里菜・笹野真衣・齊藤結衣・武田有史・濱地大志・久保田直悠・久保井あかり・井口小雪・佐藤亜紀・大藤朝香・峯村彩花・河村慎也・秋谷穂奈美・遠藤謙・華原叡美子

皆さんに「世界遺産を思い浮かべてください」と言うと、恐らくヴェルサイユ宮殿などの豪華絢爛な建造物を思い浮かべるであろう。確かに、それらは視覚的なインパクトがあり世界遺産の代表例と言える。しかし、豪華な外観や見た目の迫力だけが世界遺産の価値ではない。

私たちはこの1年間「世界遺産とは何か」をテーマに議論をしてきた。その中で世界遺産の在り方に多くの疑問を抱くようになった。例えば、世界遺産がビジネスとして利用されるようになり、本来の世界遺産の在り方から逸脱してしまっていることが挙げられる。

今回私たちは富岡製糸場を通して世界遺産の価値を見つめ直した。富岡製糸場は2014年に「富岡製糸場と絹産業遺産群」として世界遺産に登録された。世界遺産に登録されて初めて「富岡製糸場」という言葉を耳にする人も多かったのではないか。そんな富岡製糸場であるが、実は世界遺産としての価値がパーフェクトに認められた数少ない遺産である。その理由は、高品質生糸の大量生産をめぐる日本と世界の相互交流と、世界の絹産業の発展に重要な役割を果たした技術革新の主要舞台となった場所だからである。そこで、私たちは4つの観点から富岡製糸場を捉え、世界遺産の価値を見つめ直した。

1. 『産業遺産としての富岡製糸場』

桑を栽培し蚕を飼い、繭を生産する第一次産業、その繭から生糸を作る第二次産業、その生糸を海外に輸出する第三次産業という養蚕、製糸、輸出その全てを富岡製糸場が担う総合絹産業の中心であった。

2. 『富岡製糸場の経営体制』

官営時代には模範伝習工場として利益よりも技術伝達に力を入れ、民営時代には日本でも指折りの財閥であった三井家、日本有数の生糸貿易商であった原合名会社、世界最大規模の繊維企業であった片倉工業の3つの企業によって経営が引き継がれてきた。片倉工業時代には修復工事を当時の復元工法にこだわり、現在の姿が保ち、再び民から官の手に戻った。

3. 『フランスとの関わり』

富岡製糸場はフランスとの交流が根強い。その中でも富岡製糸場の主要建造物である東繭倉庫の建築と1人のフランス人指導者ポール・ブリュナとの関わりが深い。東繭倉庫は木骨

煉瓦造という和洋折中の唯一無二な建築様式に、フランス積みの煉瓦が使われている。ブリュナは富岡製糸場の土台作りとその後の発展に力を注いだ。

4. 『富岡製糸場と工女』

技術革新の主要舞台として富岡製糸場があり続けた背景には工女の存在が欠かせない。機械製糸から自動製糸技術の発達を伝え、革新的な養蚕技術の開発とその普及に大きく貢献した。

以上の点を踏まえて、今まで気づかれることの少なかった世界遺産の重要な側面について、富岡製糸場を例に皆さんに伝えた。その結果世界遺産の外見の卓越性だけではなく、その遺産が持つストーリーや背景を理解することが、世界遺産に対する別の考え方を提示できると立証した。





観光の文脈の中で消費される 秩父札所巡礼

佐々木一恵ゼミ

田中直実・藤本理沙・小口夕香・柏倉妃香里・金賢廷・服部大・田所莉歩・杉崎皓・矢部彩香・
北野初季・谷井みづき・喜舎場洋平・下江航平・千葉かな・平塚咲希・江部綾

昨今エコツーリズムやグリーンツーリズムなど新たなツーリズムが推進され、宗教ツーリズムもそのひとつとして世界的に注目を集めている。中でも聖地巡礼は人気の高い宗教ツーリズムであり、1993年には「サンティアゴ・デ・コンポステーラの巡礼路」が世界遺産に登録された。日本においても、三重県、奈良県、和歌山県の三県が一体となって運動を展開し、2004年に「紀伊山地の霊場と参詣道」が世界文化遺産に登録されている。また、「四国八十八箇所霊場と遍路道」についても世界遺産登録推進協議会が発足し、世界文化遺産指定を目指す運動が行われている。世界遺産登録への動きから熊野古道や四国遍路は、メディアに「観光地」として取り上げられ、世界各地から多くの観光客が訪れるようになった。さらに日本ではアニメの聖地巡礼がブームになっていることも注目すべき事象である。

本発表では、聖地巡礼を消費される観光資源と捉え検討した。その事例として、埼玉県秩父地方にある秩父三十四観音霊場を巡る秩父札所巡礼を取り上げた。その変遷を追うことで秩父札所巡礼が観光という文脈の中で消費されているという現象を明らかにすることを目的とした。秩父三十四観音霊場は、西国霊場、坂東霊場と合わせて日本百観音と言われている。12年に1度午年の年に、三十四か所で一齐に御開帳が行われることも特徴の一つである。その始まりは諸説あるが、最も古い記録は室町時代中期の番付であり、盛んになるのは江戸時代に入ってからであった。当時の中心地であった江戸から近く、関所を通る必要がなかったという手軽さから、家庭から出る事がほとんどなかった女性が非日常を求めて秩父札所巡礼に訪れることが多かった。つまり秩父札所巡礼に対しての人々の動機は成立当初より信仰心だけではなく、観光と結びつけられる要素があったと考えた。その後明治時代に政府により神仏判然令が出され神社と寺院が完全に分離されることとなる。このことが「寺を廃し、仏像を破壊せよ」という過大解釈に繋がり、お寺の衰退と共に秩父札所巡礼も衰退していく。しかし戦後には高度経済成長やメディアの発達、交通網の発達により再び繁栄していく。このようにその時代の政治的経済的要素、社会状況に影響を受けながら、秩父札所巡礼は観光という文脈の中で現代まで衰退と繁栄を繰り返しており、その変遷を、①1500年代～江戸時代②江戸時代～昭和③現代の3つの時代区分に分けて考察していった。またこの中で、秩父札所巡礼の特殊性についても明らかにしていった。

③の現代における秩父札所巡礼は、ゲスト＝観光客、ホスト＝観光地住民という2つのアクターの相互作用により成り立っていると考え、この2つのアクターに対してのインタビュー調査を研究方法として用いた。発表方法としては、上記の研究を通して明らかになったことを、6枚のポスターにわかりやすくまとめ掲示をした。

奨励賞

『知』のコミュニケーションを 生み出す場としての空間デザイン

甲ゼミ

出川瑛美子・小椋美佳・佐々木綾



[発信者]

1. シートを新規作成、編集
2. システム(電子書籍化されたもののウェブページ)における。その際、ハッシュタグを付けてカテゴリズする(例 #SA, #ゼミ, #就活等)

<シート例>

件名の候補
1390000
件名の候補口。

FAVORITE

[受信者]

1. システム(ウェブページ)にアクセス
2. 検索ボックスで「#SA」等で検索、閲覧
3. 気に入ったものがあれば、「favorite」ボタンでお気に入り追加 → 後でお気に入りしたものの一覧が出来る(×「favorite」の中で自分でもカテゴリズ可能)

<favorite-一覧例>

FAVORITE
▽ #SA件名
件名
▲ #SA実行
▽ #ゼミ件名
件名

<お気に入り追加方法>

件名
FAVORITE

FAVORITE
件名
件名

1. 「favorite」
✓をつける。
2. ハッシュタグをつける。

最優秀賞

723

鈴木晶ゼミ

青山里奈・馬場あゆみ・松本栞・中田蒼・堀内美鈴・藤尾愛美・渡邊美友・信江亜由美・山崎聡子

これは 723 日の恋の物語——

一人の女の子が過去の恋愛に縛られている中、仕事を通じて大切なことに気づき、一人の女性へと成長する姿を描いた恋物語。

この作品に込められたメッセージはまさに『向き合えば、何かが始まる』です。自分と向き合い、相手と向き合い、ちゃんと過去を受け入れた時にきっと新しい何かが始まる、という、前向きなメッセージを作品を通じて受け取ってもらえたら嬉しいです。

今回の制作は役割分担を昨年よりもより明確にし、各自が責任と情熱を持って取り組みました。

それぞれの観点から、作品制作において工夫した点について紹介します。

【監督】

私たちがこの映像を作る上で重視したことは「全員で取り組む」ことです。

なぜなら、学生である私たちがより質の高い作品を作るためにはチームワークが必要だと考えたためです。全員の意見を持ち寄るため衝突することも多くありましたが、私たち一人ひとりが今までゼミを通じて得た知識を持ち寄ることで「十人寄れば文殊の知恵」を実現することができたと考えます。この映画を制作するにあたり、私たち自身も真剣に取り組み、妥協をせず本気で意見をぶつけ合っていくことで、主人公だけでなく自分たち自身も成長することができたと考えます。



【演者】**▼主人公 なつみ**

私たちは、あと4ヶ月でそれぞれの未来を歩みだします。この主人公のように「失敗しても大切な事に気づき、成長し続けられるように！」そのような思いを込めてワンシーンワンシーン一生懸命演じました。喜怒哀楽以外の微妙な感情を表現することが一番難しかったのですが、観た人の心に響き、少しでもなつみに共感してもらえれば嬉しいです。

**▼元彼 ゆうた**

優太を演じる上で声にはかなり気を遣いました。控えめで気弱な印象を出すため、やや声は高めにして役を演じました。その一方でなつみに対し自分の意見を述べる際は、少し声を低くしてシーンに重みができるようにしました。

▼親友 とも

昨年の作品と同様、今年も、登場人物どうしの関係性が話のキーとなるような作品となっています。主人公の親友役として、台詞の言い回しや雰囲気づくりを工夫しました。主人公との関係性を細かく描けるよう努力したので、主人公を取り巻く微妙な感情の動きに注目して観ていただきたいです。

【カメラ担当】

前回の学会作品の反省をした際に、作品の魅力が増すにはストーリーもさることながら映像の美しさも必要であることが分かりました。今回は、場面と場面を繋ぐトランジションでわざとピンボケを生じさせたり、夜景のシーンでは、玉ボケを使用してみたりといった様々な挑戦をしました。暗い場所での撮影ではノイズが発生してしまうことも多くありましたが、被写体にライトを多く当て、感度を出来る限り下げることによってノイズの問題を解消に努めました。

**【音声担当】**

音声係はただ音声を撮るだけではなく、台詞の言い方やスピードを注意深く確認し、アドバイスすることが重要でした。この作品のセリフは全てアフレコで構成されています。役者は映像に合わせて声を合わせるだけでなく、違和感のないよう感情をいれなくてはなりません。役者と一緒に、納得するまで何度も撮り直しました。音声担当として、役者をサポートすることに重きを置いて活動しました。

【編集担当】

まずシーンとシーンのつなぎ目にこだわりました。本作品は過去と現代のエピソードが交互に出てくるため、エピソード同士をティルトアップした空や同じ動作（落とした物を拾うなど）でつなげて居ます。また、セリフでカットを変えるのではなく、そのシーンの雰囲気や重要とされるものをフォーカスするようにしたことで、カットの切り替えが自然になるように心がけました。そして、映像を撮る際の雑音がぶつ切りにならないように、作品全体に雑音をいれて自然に仕上げることにこだわりました。



【最優秀賞受賞をふまえて 監督より】

当日までは自分たちがどう作業を進めるか、いかに妥協せず良い作品を作れるか、ということばかり考えていました。

しかし発表当日、当たり前のことではありますが、映画は人に観て頂いて初めて価値が見出せるということを実感しました。審査をしてくださった教授方、学生審査員方、OBOGの方々、他ゼミの友人、後輩たち全ての方々が私たちの作品を見届け、リアクションを下さってはじめて、映画として認められたと実感しました。

また、私たちは明るいらすとシーンにしたいという考えから夜間撮影においても色彩にこだわり、画面に赤を取り入れるという工夫を行いました。その工夫を評価して頂けたことを大変嬉しく思い、観客の皆さまから頂ける評価にも映画としての要素を見いだせたと考えます。

私たちが観客の方々に伝えなかったメッセージは「向き合えば、何かはじまる」という主人公の成長がしながら気づいていく前向きなものです。そのストーリーに実感して頂けたこともたいへん嬉しく思ったと同時に、映画として認め最後まで鑑賞して下さったことにも御礼を申し上げたく思います。

Following

島田ゼミ

小泉堯史・飯野麟太郎・上霜圭央・大場郁美・澤邊司・田村莉沙・土屋菜穂

中村優太・百瀬聡亮・山本陸

この作品が制作されるにあたって、いくつかのテーマがあった。

一つは、「身の回りに潜む危険」である。本作では、SNS（ソーシャル・ネットワーキング・サービス）を題材としてこのテーマを描いた。現実世界でのコミュニケーションと違い、ネット上で行われる会話では互いのユーザーの顔が確認できない。これが、知り合いどうしの場合であれば何ら問題はないが、SNSに慣れてくるとそこには様々なシチュエーションが生まれる。また、SNSアカウントと実際のユーザーが似ても似つかないというギャップが存在するケースは少なくない。なぜなら、ユーザーの「自分はこうありたい」という欲望が体系化した場所がSNSだという捉え方もできるからだ。つまり、そこにユーザーの本来の姿がないとしても、その用途は人それぞれであるから構わない。しかし、自分とはかけ離れた性質のSNSアカウントのコミュニケーションには、危険を垣間見る瞬間もあるのではないかというのが本作の制作意図である。

もう一つは、「惰性的な関係性」である。このストーリーには、男女それぞれ同性のペアが登場するが、誰にでも分かるほど二組とも関係が薄っぺらい。皮肉的な言葉のキャッチボールも多い。わざとそのように演出したのには理由がある。時々、話し相手が何を考えているのか見当つかなくなる経験は誰にでもあるだろう。常に相手の心を探りながら会話をしなければいけない、コミュニケーションにある一種のややこしさである。観る人にこの感覚を味わってもらいたい。また、主人公の男女はどこかに劣等感を抱いている。具体的に何か嫌なわけではなく、ただどこか負けた気がしている。友人には有って、自分には無いものを無意味にも考えてしまう。そして、この感情を補填するかのように、SNSに手を伸ばす。このように、一つ目に挙げたテーマと絡めることで、作品全体に流れる怪しさの増長を狙った。

最後に、ホラー調に作品が仕上がるように撮影や音楽、編集で工夫を凝らしたので、少しでもそれが伝われば幸いだ。

最優秀賞

TODAY

稲垣ゼミ

磯野志保・玉井瑛理・和泉亜里紗・西山梨菜・青木優里香・小林采未・坂井桜
竹村祐哉・福原知佳・武田花梨・井口志乃・石井陽子・松橋さやか・齋藤瑞季
田中琴子・山本詩帆・最上拓朗・船越由羽子・山田茉奈・青木謙祐

“今日”はあなたにとってどんな日ですか。誕生日、記念日、何かの締切日、バイトの日、デートの日、いろいろあるでしょう。しかし世の中の大多数の人にとって、“今日”は数ある日々の中の一日に過ぎない。この何でもない“今日”が、私たち稲垣ゼミのインスタレーションのテーマになりました。

稲垣ゼミは、今回の学会展示のテーマを決めるにあたって、なかなか話し合いが進まず非常に苦労しました。毎週各自がアイデアを持ち寄り発表したが、全員が納得するアイデアが中々出ません。

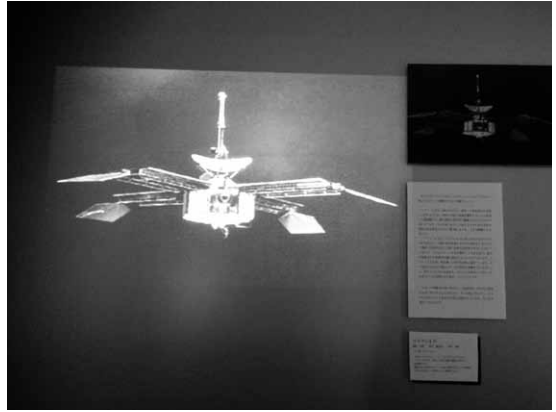
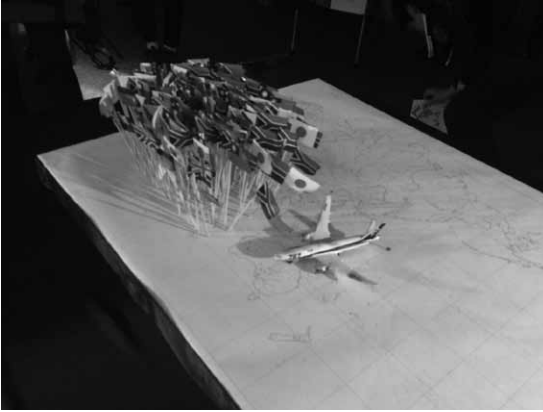
そんな中で、今年話題になったニュースからテーマを探ってみることになりました。2020年のオリンピックに関わって、ザハ・ハディドにつ

いて、エンブレム問題、TPPが合意に達したこと、安保法制、SEALDsによるデモ、痛ましい殺人事件の数々、野球選手の新記録やラグビー日本代表の活躍、毎週のように耳にする有名芸能人の結婚など、様々なニュースが思い出されました。

毎日、何かはどこかで必ず起きています。“何もない日”などありません。誰かが生まれて亡くなっている。誰かが誰かを助けたり殺したりしている。婚姻届を出した人もいれば離婚届を出した人もいる。ある個人がどんなに普通に平凡に、つまらない一日を過ごしていたとしても、別の個人にとっては特別で、大変な一日なのです。

そこでわたしたち稲垣ゼミは、“今日”をテーマに選びました。“今日”、つまり国際文化情報学会が行われる2015年11月28日を、インスタレーションで表現しました。毎日その日しかない特別なものであることを表現し、一日一日を見つめ直してみたいというメッセージを伝えたい。それと同時に、何気無い一つの切り口から、たくさんの物事や視点が見えてくることにも着目してほしい。という思いを込めて作品を作り、展示しました。





完 壁

森村修ゼミ

上田瑞季・丸谷拓人・横山亮太郎・奥山友香・高橋千尋・福田光希・奥川のぞみ・北村英子

私たち森村ゼミは、春学期にユング心理学を通し、「深層心理」について学んできました。

学会では、彼の思想をもとに「意識」「無意識」を可視化することを目指し、目に見えない「こころ」の様子を表現しようとしてきました。そのために何度も議論を重ね、教室という限られたスペースでいかに良い発表ができるかを考えました。

ところが、私たちの考えは上手くまとまらず、行き詰まったのです。そこで出てきた疑問がひとつ。

「私たちは、周りから良く見られたいという思いばかりが先行し、本当にやりたいことを見失っているのではないか？」

名のある大学や企業に入りたい。高いブランドの服を身につけてみる。流行りの飲食店へ行き、Facebookに投稿しては皆から「いいね」を沢山もらおうとする。何を伝えたいのか不明確だが、資料だけを集め、それなりにまとめて卒論として提出する、などなど…。

このように、「自分を良く見せよう、完璧に見せたい」という気持ちは誰にでもあります。しかし、完「壁」を目指して築き上げたその「壁」の先にはいったい何があるのでしょうか？

私たちのインスタレーションでは、こうした学会への準備を通して気付いたことをメッセージとして表現しました。実際の作品では、展示空間を「壁」、「空の間」、「日常」の三つに分け、発表を行いました。

最初に見られる「壁」は、「自分を良く見せるためのアイテムたち」の集積で作りました。

ひとつひとつのアイテムたちは極めて日常的なもの、たとえば化粧品やアクセサリ、就活本などです。「他者から良く思われたい」「とりあえず名のある大学に通いたい、大手の企業に就職したい」、このような気持ちを満たしてくれるアイテムたちを積み重ねて、私たちを守る「壁」にしました。しかし、その「私たちを守る壁」は、私たちの行く手を阻むようにそびえたっています。そしてその壁を抜けるとそこにあったのは…。

次の「空の間」では、いろいろなものを持っているはずなのに何か乏しい、空虚なところを表現しました。他者から良く見られたいという思いから築き上げた「壁」の向こう側には、何もなく、ただ空虚で真っ白な空間が広がっています。「他人からどう見られるかよりも、もっ



と他に大事なことがあるのではないか」、そう思わせるような空間を目指しました。また、空虚であるということは寂しさを感じさせる一方、自分次第で自由自在に彩ることもできるというメッセージも込めました。

日常の様々な場面で、私たちは自分を良く見せようと躍起になってはいないでしょうか。最後の「日常」では、そのような「日常」の音や会話を収録し、私たちが伝えたかったメッセージをデザインしました。「日常」のなかで聞こえるところの声やさざまな問いかけ、「いったい何を守っていたのだろう」と、自分が「壁」によって守っていたものの空虚さを表現しました。また、「日常」の音をより身近に感じていただくために、音源を自分たちで収録しました。

私たちは、完璧を目指すことが悪だとは思いません。しかし、その完璧さを追い求めるあまり、大事なことを忘れてはいないでしょうか。知名度、就職率、偏差値など…。

数字や結果、地位や名声に踊らされることなく、自分がこころからやりたいことを追求していく。そんな自分でありたい。完全な「壁」を築いたところで、「完璧」にはなりえないのだから。





Do Experience

甲洋介ゼミ

松坂絵里香・柏木瞳・達可早紀・山田祥世・小谷野望・森田香子・井口弓夏

1. はじめに

1.1 問題意識

我々は、授業で五感と経験の関係について学習したことをきっかけに、「経験」「身体性」「情報化社会」について考えた。さらに、ブレインストーミングを行うことで、研究の基盤となるチームの共通概念を見出していった。そして我々が抱える問題として、情報化社会を生きる上で身体を伴う直接的な経験のあり方が変化してきているのではないかという考えが浮かび上がった。その中でも、私たちの日常生活において、PC やスマートフォンなどの情報機器の比重が大きくなるにつれて、身体的な経験が省略されつつあるということに気付いた。このことから、経験の積み重ねこそが、自己の価値観や個性を作り上げる基盤となるものなのではないかということ、問題意識として設定した。そこで、一方的に研究の成果を提示するだけでなく、オーディエンス一人一人に経験について考えてもらうきっかけを示すために、以上の三点をテーマとして設定し、インスタレーションとして具現化することによって、実験を行うことにした。

1.2 調査・分析概要

前述の問題意識に基づいて、情報化社会における人々の意識についての実態を明らかにするために、インタビュー調査を行った。合計で 12 人の被験者にインタビューを行い、その後情報化社会における対象者の意識について分析した。まずインタビューをするにあたって、デジタルネイティブと呼ばれる 10 代以下、情報がアナログとデジタルの中間期にあるとされる 20 代～ 40 代、アナログ世代と呼ばれる 50 代以上に区分し、それぞれ情報化社会についての見解が異なると予想した。そして、三世代それぞれ 2 人から 5 人を対象に約 10 分程度のインタビューを行った。インタビュー形式は、一対一で、相手の話をじっくりと聞き出すことの出来る半構造化インタビューを採用した。質問項目は、(1) 生きていると感じる瞬間はどんなときか、(2) 季節を感じる瞬間はどんなときか、(3) 最近携帯やスマートフォンで撮った写真はどんな写真か、(4) 情報化された現代において何か感じていることがあるか、の以上 4 点の質問項目を設定した。(以下、質問を番号で記載する。)

(1) から (4) の質問項目をそれぞれ分析した結果、二つの傾向が浮かび上がった。一つ目は、日常生活における経験が身体を伴う直接的な経験ではなく、媒体を通じた間接的なものにな

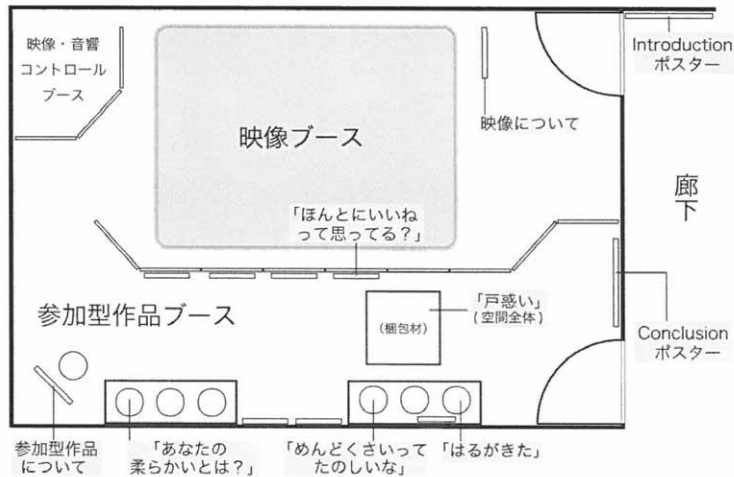
りつつあるということである。これは、(1)と(2)の質問項目に顕著に表れている傾向だった。(1)では、身体的な経験が多く挙げられており、直接的な経験が失われているわけではないことがわかった。一方で(2)では、季節を感じる過程でメディアを通して得られる情報についての回答がいくつか見られた。例えば、季節によってイメージづけられた広告や商品またはイベントによって、季節の変化を感じるという回答があった。これについて、季節を感じるという直接的な経験の中に、メディアが入りこんできたことによって、間接的な経験になりつつあるのではないかという分析を行い、上記のような傾向を見出した。二つ目は、情報化社会のすべてを否定しているわけではないが、対象者が情報化社会に対し違和感、戸惑いを覚えているということである。これは、分析全体を通して見出した傾向であり、我々は、この違和感、戸惑いが本研究においてキーワードになるものだと考えた。さらに、三世代それぞれの情報化社会に関する意見が異なるというステレオタイプの仮説は誤りだとわかった。そして、すべての人が情報化社会における便利さを手放せない一方で、それらに対して疑問や不快感つまり違和感、戸惑いを抱いているということを導き出した。そして、これらの分析からわかったことを、第二部の参加型の展示で具体化することにした。

2. 展示

2.1 導入部・全体構成

今日、情報技術の発達からさまざまなサービスやシステムが誕生し、それらは日々進化している。このような情報化社会において、我々はメディアから多くの恩恵を受けている。世界のニュースは秒単位で更新され、いつでもどこにいてもその情報を受け取ることができる。また、夜中にオンラインショップで注文をして、次の日には家でその商品を受け取ることができるし、SNSのタイムラインには異国に住む友人の近況が流れ、コミュニケーションアプリを使えばその人の顔を見ながら会話をすることさえもできる。情報技術の発達は、時間や手間、物理的な距離などのあらゆるものを超えて、我々の生活をより便利に、より豊かにしているかのように見える。しかしその一方で、身体を伴う直接的な経験が減少しつつあると考える。以下の二つの例を取り上げて検討してみよう。友人とコミュニケーションをとる際、液晶画面の向こう側にいるSNS上の友人とメッセージのやり取りをすることと、実際に会ってカフェでおしゃべりすることに違いはあるのか。または、普段何気なく歩いている道やそこから見える景色は、昨日と今日とで同じものだとすることができるのであろうか。

インスタレーションでは、第一部で我々の生活の一部を題材とした映像から、日常生活でどのように感じているのかを再確認してもらおう。それを踏まえた第二部の参加型の展示では、体験者一人一人にとっての「直接経験」を考えるきっかけを与えるものにする。そして、インスタレーション全体を通して、「経験」のあり方について考えるきっかけとなることを狙う。この二つの狙いを踏まえて、レイアウトは次のようにした。



2.2 映像作品「通学路」

この映像作品は、駅から大学へ歩いている大学生の視線を表現したものである。通学路という慣れ親しんだ風景を主観的な視点から撮影することで、その中に潜む変化を再認識してもらおう。また、身近な環境を普段と異なる観点から見ることで、普段は目に留まらないような景色や、耳に入らない音を感じてもらおうことを狙った。

——いつものように携帯をいじりながら歩く通学路。周りの人が歩き始めたのを合図に横断歩道を渡り始める。「…の、あの…」イヤフォンを外し、声のした方に振り向く。「落としましたよ。」知らぬ間に定期入れを落としてしまっていたようだ。「ありがとうございます。」そのままイヤフォンをまとめ、携帯もポケットに入れた。

——だんだん近づいてくる電車の音。乾いた落ち葉の音。階段のひび割れ。すれ違う人の話し声、遠くにぼんやりと見える校舎。他人との距離感。視線が交わることのない会話。

少し意識を変えるだけで、他者と自分との視点の違いに気づくことができ、それは自己の価値観や個性を見つめることにつながるのではないだろうか。

〈制作〉

○撮影

ウェアラブルカメラを頭に装着し、体験者の視線の位置を想定し、その位置から撮影した。また、広角レンズを用いることで、我々の視界により近い広画角の映像を撮影した。

○録音

5.1 チャンネルサラウンドマイクを用いて環境音を、ショットガンマイクで足音録音した。録音機器はサンプリング周波数 96kHz の量子化ビット数 24bit の情報量で録音可能なポータブルレコーダーを使用した。

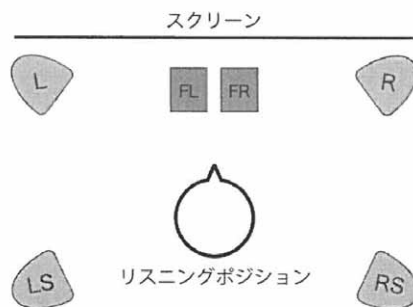
〈再生設備のインスタレーション〉

○映像

スクリーンにウェアラブルカメラで撮影した映像を投影した。スクリーンはリスニングポジションから視野角 120°を確保出来る位置に設置をした。

○音響

スピーカー配置は、サラウンドマイクの録音設定を再現するようにリスニングポジションを決め、指向性の高いスピーカー4つ (L, R, LS, RS) を耳の高さにスピーカーがくるように右記配置図のように設置した。スクリーン両端の2つのスピーカーからはそれぞれ左右からの音と正面からの音を出力。残り2つの背後に設置したスピーカーからは、それぞれ左右の背後からの音を出力した。この4つのスピーカーからは環境音を流し、音のする方向や音の流れを細かく表現した。また、約 30°角度を上げて足下に設置したフロアスピーカー (FL, FR) からは足音を流した。



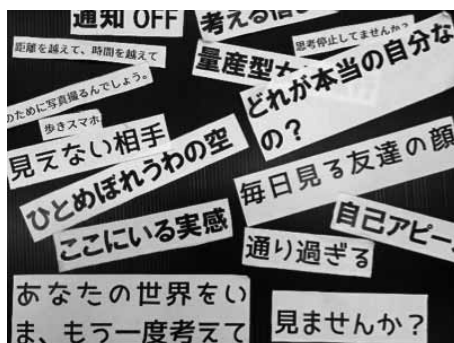
これらの手法を用いて、提示したいことをデフォルメした映像を制作した。そして、出来る限り実際の環境に近い状態を再現した。この映像作品を通して、普段無意識のうちに通り過ぎてしまうことに気づくことで、第二部の作品への動機付けとなることを狙った。

2.3 参加型作品「気づきの築き」

分析によって明らかになった戸惑いを具現化するため、参加型の展示を採用した。そして展示を体験しながら戸惑いを共有していくことで、それを体験者それぞれが自身のこととして考えてもらうことを目的とした。また、それぞれの作品が情報化社会における身体を伴う経験のあり方を様々な観点から体験者に対して問うていくことで、体験者が情報化社会という時代を多方面から見きかけとなることを狙う。以下は、一部の作品の概要を写真とともに示したものである。

「戸惑い」

インタビュー調査の分析から見出した戸惑いを体験者と共有すること、情報化社会での情報の取得における身体のあるき方について問うことの2点を目的としている。作品をインスタレーション空間全体に無造作に配置することで、体験者に多くの戸惑いの言葉を目にしてもらう。ここで使用した言葉は、



インタビュー調査でわかった対象者の戸惑いに関する言葉から選択したものと研究テーマのキーワードとなる単語である。また、体験者が言葉が印字された紙を拾い、空間に体験者の意図に沿って配置できるように仕掛けにした。

「あなたの柔らかいとは？」

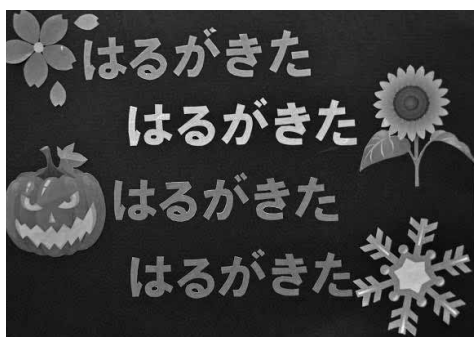
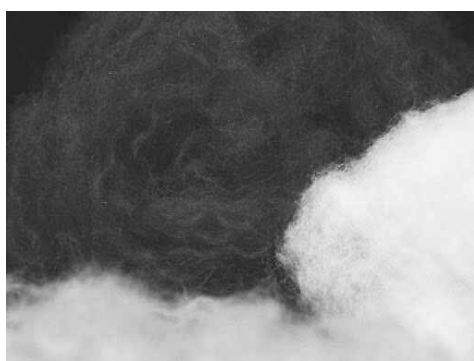
感覚器を通して得た情報は、培われてきた経験によってそれぞれ違うものになるのではないかという問いかけを表現したものである。綿、毛糸、ミシン糸など触り心地の異なる数種類の糸を用意し、それを加工したものを体験者に手で触れてもらう。そして、手という感覚器を通して得た「触り心地、柔らかさ」は、触る人によって異なり、その違いは経験によって培われた個性によって生まれるということを体験者に実感してもらうことを意図している。

「はるがきた」

「季節感」の形成に注目し、体験者に対して、どのようにして事象に対する概念形成をしているのかを問うことを目的とした。4色で表現された「はるがきた」という文章と、それに関するイメージ画像を表すことで、「はるがきた」という文章に対して違和感が生じるという考えのもと作成した。また我々は、季節に対するイメージが広告などによって操作・固定されていると直感し、自己の概念について再考してもらうことも意図している。この作品を通して、身体を使った直接的な経験によって培われていく季節の移り変わりに対する概念が、情報化社会においてどのように形成されているのかについて考えることを狙った。

「本当にいいねって思ってる？」

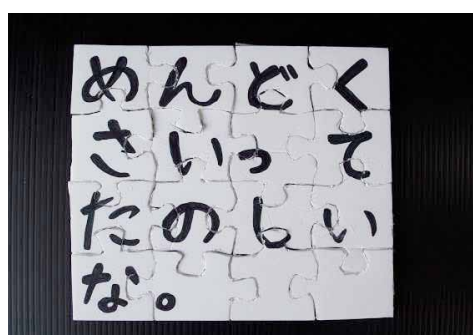
Facebookにおける「いいね」のマークと「本当にいいねって思ってる？」という言葉で、「いいね」によってある対象への個々の複雑な感情をひとことで表現することが、自己の感情や意見をおざなりにすることにつながるのではないかという問いを提示している。食事や外出先での



体験を限られた言葉に集約・省略することは、情報を発信・受信する上で、自らの価値観を画一化してしまうことにつながる。我々は、個々にもつ感情や意見をひとまとめにしてしまうこと、それをただ受け取っている現状を問題として捉えた。この作品を通して、SNS利用の現状を認識してもらおうきっかけとした。

「めんどくさいってたのしいな」

身体を使う直接的な経験において、「手間」がひとつの重要な役割を担っていることを提示することを目的としている。効率性、合理性を求める情報化社会で手間は省略されていくが、手間に価値を置くことが身体を伴う経験を培っていく上で重要な役割を担っている。そしてそれらが、我々の価値観や個性を豊かにしていくものなのではないだろうか。本作品を通して、パズルという手間のかかる娯楽、そして完成したのちに見えてくる言葉によって得られるものの意味を、この問題意識と照らし合わせて考えてもらうことを狙った。



2.4 終結部

インタビュー調査の結果を通して導き出した戸惑いは、個々に異なるものであるため、一概に解決できるものではないかもしれない。しかし、情報化社会に生きる人々が、この戸惑いとの関係を自己の価値観や個性を持って模索している。その価値観や個性は、過去の経験が基となって生まれるものである。しかし、現代社会では、経験のあり方が変化を遂げているように見える。情報化社会において、メディアはいかなる時も我々のそばにあり、その存在を色濃くしてきた。いつしかそれらは、身体を伴う経験に入りこみ始めた。そして、その変化に対して戸惑いを感じつつも、その便利さを手放すことのできないという矛盾を生み出したのである。我々は、この状況において身体を伴う経験を捉えなおすことこそが情報化社会における戸惑いに対し、一つの出口を示すものになりうると考える。この経験を積み重ねていくことが、感じ取る力を養っていくのであり、ものごとや環境をより多方面から見きかけを提供するものである。視点や価値観が180度変わることはなくとも、少しでも我々の見ている世界が広がれば、情報化が加速する社会とのよりよい付き合い方を発見できるのではないだろうか。

3. おわりに—発表を終えて

情報化社会という言葉から出発した本研究は、人々が抱える戸惑いという問題点を導き出し、それを解消する方法を身体を伴う経験のあり方の再考という形で提示した。体験者同士が会話している様子から、情報化社会に対する意見交換や作品に共感していることが伺えた。さらに、いくつかの発表に対する感想では、感覚や身体という概念を用いた表現が見られ、身体的な経験を発表から読み取ってもらえたと思われる。こうしたことから、発表を通して、体験者とその意図を共有でき、きっかけを提示したと考える。

時代は絶えず変化していくものであり、情報化社会も現時点におけるひとつの様相に過ぎない。今回提示したきっかけも、時代が移り変わっていく中で、意味をなさなくなってしまうのかもしれない。本研究が見出した戸惑い自体は、いつの時代にも変化に対して生じることであるが、現代社会において、大きな意味を持つのではないだろうか。それは、社会の変化の速さにだんだんと置いて行かれ、戸惑いを消化する方法すら見つけられないまま、ただ便利さを追求する方へ我々が向かっていくことを示している。我々は体験者に提示したきっかけの先にあるものとして、情報化社会の将来を構築していくことが必要だと考える。それは、現代社会に生きる一人一人がすることである。情報化社会において消えかかっている身体存在を再認識させることで、便利さを追求し、情報化を加速させていくことから一旦離れて、自己の価値観や個性をもって、自己のあり方、社会のあり方を見直していくこと、情報化社会との距離感を再構築していくことが必要なのである。そして、本研究をきっかけに始めて探究は人々の無意識下にあったものを掘り出し、提示することを続け、情報化社会と人々との関係を観察し続けていくことによって引き継がれていく。



